

# 紀 要

## 第 8 号

---

### 目 次

#### 序

- 近江へのアプローチ・その2 神崎郡篇…………… (近江歴史クラブ)
1. 愛知川左岸域の開発と水利…………… (佐野 静代)
  2. 後期古墳…………… (細川 修平)
  3. 丸山1号墳出土土師質陶棺について…………… (中村 智孝)
  4. 古墳時代の鍛冶工房…………… (大道 和人)
  5. 古代の集落…………… (畑中 英二)
  6. 建物遺構…………… (神保 忠宏)
  7. 古代寺院—軒丸瓦の文様から—…………… (重岡 卓)
  8. 郷 (里)…………… (内田 保之)
- まとめにかえて……………
- 日本古代国家形成史論に関する諸前提
- 研究ノートあるいは覚書その1—…………… (芝池 信幸)
- 春日山古墳群分布調査報告… (岩橋隆浩・大崎康文・工藤基志・高橋あかね)
- 6世紀代における木棺直葬墳の副葬・供献について
- 葬送習俗としての「主体部内容器埋納」にみる  
「畿内型横穴式石室」との関係を中心に—…………… (畑中 英二)
- 高島郡における製鉄の問題から—6世紀を考えるための序章— (細川 修平)
- 湖南地域の異方位地割と古代の建物方位…………… (田井中洋介)
- 木炭窯の形態からみた古代鉄生産の系譜と展開に関する予察
- 滋賀県瀬田丘陵の事例を中心に—…………… (大道 和人)
- 赤野井湾遺跡出土の鋤…………… (阿刀 弘史)
- 

1995. 3

財団法人 滋賀県文化財保護協会

# 大津市春日山古墳群分布調査報告

岩橋隆浩・大崎康文・工藤基志・高橋あかね

## 第1章 はじめに

春日山古墳群は琵琶湖西岸の堅田平野、大津市真野谷口町地先に位置する古墳時代後期の群衆墳を中心とする周知の遺跡である。平成5年度に滋賀県都市計画化によって当古墳群を含む県有地内において仮称間の谷口公園の計画が具体化された。当古墳群はこれまでに滋賀県教育委員会・大津市教育委員会・京都教育大学考古学研究会によって詳細な分布調査が繰り返されており、今回の公園計画地範囲内にも多数の古墳が存在することがわかっている。そこで当該地内の古墳を公園計画に活用し保護するために最終的な分布調査を行なうこととなった。調査は滋賀県土木部都市計画課の依頼によって滋賀県教育委員会が調査主体に、財団法人滋賀県文化財保護協会が調査機関となり実施した。本調査は公園計画地内のこれまでに判明している古墳の規模・残存状況およびその位置を確定することに主眼を置くとともに、当該地内をくまなく踏査することによって新たな古墳の発見にも努力した。今回の調査において確認した古墳にはその周囲に各々木杭に古墳番号を記したものを設置し古墳の範囲を明示している。

本調査の結果はこれまで公にする機会がなかったが、結果として特にE支群において新たな前方後円墳を確認するなど、大きな成果を得たため本紀要においてその調査成果を公表する次第である。

また先述の前方後円墳についても本稿において報告を行なうが、その測量調査は本事業とは別に行なった。

なお調査にあたっては真野谷口町の方々の御理解を賜ったほか、中村智孝（龍谷大学）、首藤有里（京都女子大学）、工藤基志（奈良大学）、高橋あかね・鈴木弥生・長野泰子・奥井愛（京都教育大学）諸氏の参加があった。記して謝意を表したい。

（岩橋 隆浩）

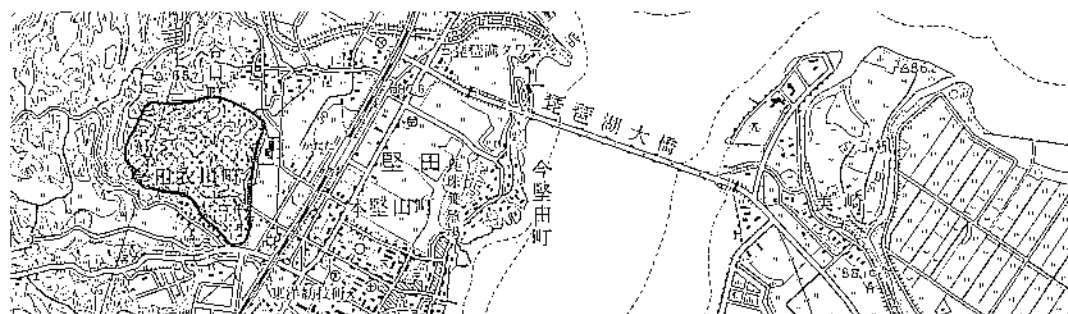


図1 春日山古墳群位置図（1：50,000）

## 第2章 春日山古墳群の位置と環境

滋賀県は、琵琶湖を中心に湖東・湖西・湖南・湖北の4つの地域に大別してそれぞれ気候風土が異なり、さらに琵琶湖も北湖と南湖に区分できる。堅田・真野地域の西側は比叡比良山地が連なり、同地域よりもさらに奥にある伊香立辺りで一番低い標高370mの途中越（龍華越・山城越）があり、北に上がると若狭街道に入り、南に下ると大原をぬけて京都へ通じている。

真野・堅田地域は、大津市平野部の最北端に所在し、古代には北陸街道が通り、付近に和辻駅が設置されていた。北は比良山地の最高峰、1,214mの武奈ガ岳を中心とする山々が見え、南はそれに続く比良山地が見える。堅田・真野地区の対岸の守山市とは1.35km弱と近い距離で、琵琶湖の最狭部となり、水深も5～7mと比較的浅くなっている。このような地理的条件の中で、真野・堅田の人々は漁業や水上交通に大きな特権を持っていた。同地の人々は常に湖と共に生活し、平安時代には贄を献上していた「和邇・堅田御厨」の贄人たちは国役を免除され、また堅田の側を通る船から交通税を徴収、時には略奪した堅田湖賊がいた。

琵琶湖は地形上北湖と南湖に分けられるが、南湖西側の陸地部も二つに分けられる。つまり雄琴から南は比叡山から続く緩やかな勾配が琵琶湖岸までのびた土地となっており、雄琴より北は丘陵低地と沖積平野が区別できる。この丘陵低地は一般に堅田丘陵と呼ばれ、古琵琶湖<sup>湖1</sup>層群で形成されている。通称春日山丘陵は、JR堅田駅から西1km離れた真野谷口町一帯にかけて所在する標高160m程の低丘陵である。その北側は真野川、南側は天神川が流れ、この両河川の浸食により、春日山丘陵の南北は奥深い広い平地を形成している。さらに、春日山丘陵自身も深い谷地を形成しており、その谷地に水田を作っているため、丘陵部と平野部が明確に分かれている。そのため、春日山丘陵は複雑な形を形成している。

真野・堅田地域にいつごろ人が住み始めたか定かではないが、昭和55年度の神田遺跡の発掘調査で、旧石器時代の終末期頃と考えられる尖頭器が見つかった。縄文時代も同じく同地域では決定的な遺跡は見つかっておらず、滋賀県全域でも縄文時代草創期の遺跡は確認されていない。大津市栗津湖底遺跡の発掘調査により琵琶湖の水位は今より5m前後低かったことが確認され、この点を考慮すると今後真野・堅田地域でも遺跡が見つかる可能性は高い。早期の遺物としては、衣川廃寺の基壇下から土器片が見つかった。神田遺跡や中村遺跡からは中期から晩期の土器片が数点見つかるに留まっている。

弥生時代は真野・堅田地域でも遺構が確認されるが、湖西地域全域にわたって高地性集落が目立つ。春日山丘陵北側の真野川に面するところに竪穴住居や焼土坑が検出された惣山・京々山遺跡があり、春日山古墳群E支群の1号墳と12号墳のあいだに春日山遺跡が見つかった。その他に高峯遺跡、新池北遺跡などが確認される。平地では神田遺跡、中村遺跡から竪穴住居が数棟見つかかり、弥生時代に人が定住していたことは確実となり、また高地性集落の存在により同時代からこの地域の重要性を窺うことができる。しかし、埋葬遺構や祭祀遺構は見つかっておらず、真野・堅田地域の首長の有無や有力性は一切解っていない。

古墳時代になると、真野・堅田地域には古墳が大量に造営される。そのほとんどが後期古墳、すなわち群集墳である。集落は弥生時代に続き神田、中村遺跡から竪立柱建物住居が数棟見つかる

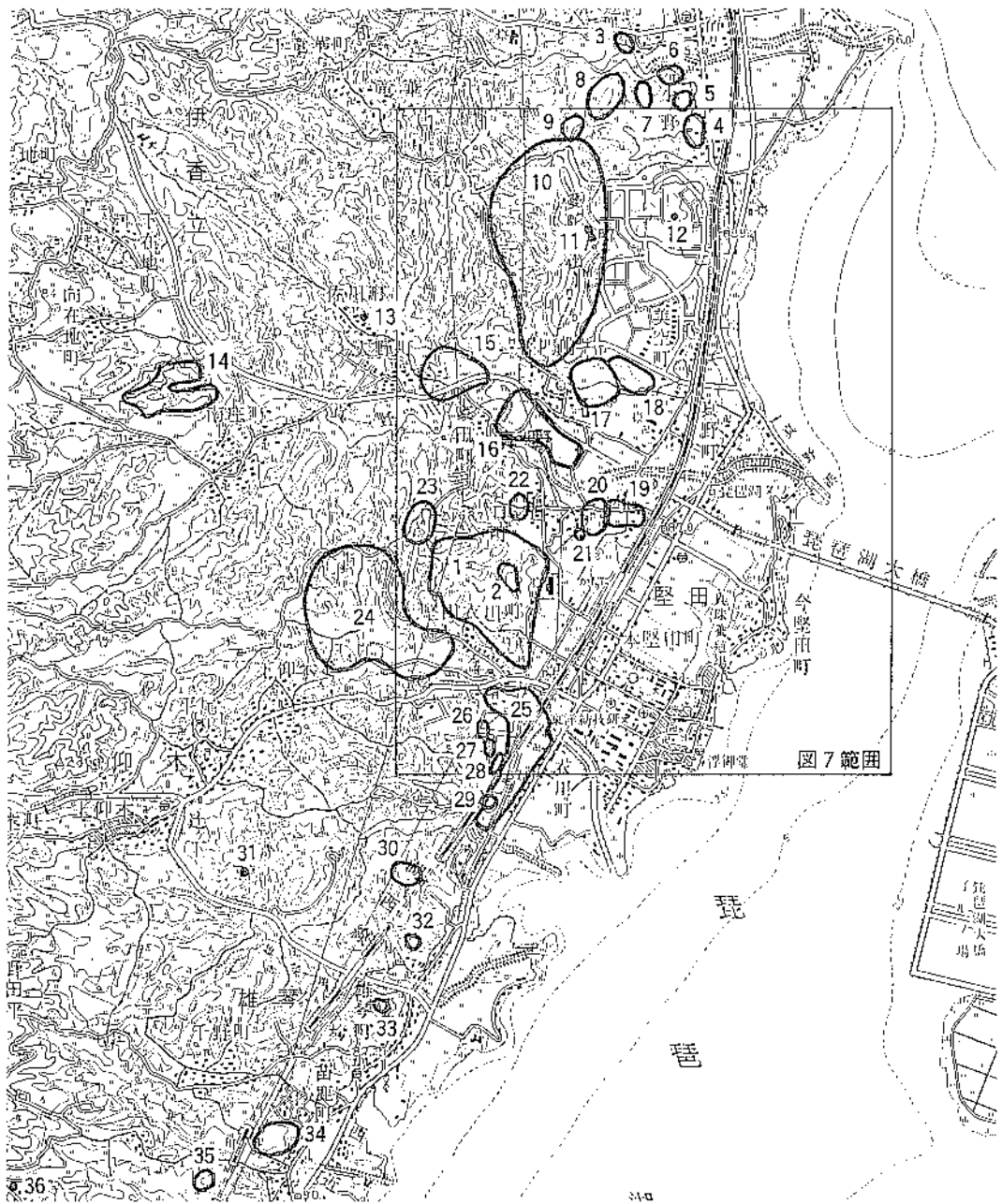


図2 周辺遺跡分布図(1:50,000)

- 1 春日山古墳群 2 春日山遺跡 3 天皇神社古墳群 4 道風神社古墳群 5 石神古墳群
- 6 小野神社古墳群 7 不ヶ谷古墳群 8 石釜古墳群 9 ヨウ古墳群 10 曼荼羅山古墳群
- 11 和邇大塚山古墳 12 店臼山古墳 13 樹下神社古墳 14 南庄古墳群 15 大野遺跡
- 16 菅門南遺跡 17 神田遺跡 18 沢組遺跡 19 中村遺跡 20 真野廢寺遺跡 21 中村狐塚遺跡
- 22 八幡社遺跡 23 惣山・京ヶ山遺跡 24 下仰木天神山遺跡 25 衣川遺跡 26 衣川古墳
- 27 西羅古墳群 28 衣川廢寺 29 坂尻古墳群 30 新池北遺跡 31 山の中古墳 32 出口古墳
- 33 雄琴神社境内古墳 34 前鹿古墳群 35 高峯古墳群 36 嶽古墳

っているが、同地域に分布する古墳数からはあまりにも微弱すぎ、今後の集落の確認を期待する。しかし、弥生時代から同じ個所に居を構えていることは同地域の意義を述べるのに重要な資料となる。その他集落遺跡として衣川遺跡があげられる。

湖西において最初に作られた古墳は、標高450mに位置し、特殊器台型埴輪が採取されている壺笠山古墳である。その後、4世紀後半から湖西全域に古墳時代前期の前方後円墳（方）墳、帆立貝式古墳が出現する。真野・堅田地域には春日山古墳（E-1号墳）の他、和邇大塚山古墳（前方後円墳・約72m）、西羅1号墳（帆立貝式古墳・約50m）、そして志賀町に道風神社1号墳（前方後円墳・約34m）が所在する。これまでの湖西地域の前～中期古墳は、木の丘古墳群（帆立貝式1基・前方後円墳1基・円墳3基）を除いて前方後円墳（方）墳、帆立貝式古墳の大型古墳に円墳が1～2基付随した形をとることが特徴と考えられていた。しかし、今回の調査により春日山古墳群には65m前後の前方後円墳が2基存在することとなり、真野・堅田および湖西の古墳時代前期の再考が必要となる。また、西羅古墳群の南に円墳2基のみによる坂尻古墳があり、古墳時代前期を考察するにあたり注目される古墳である。

古墳時代後期は群集墳が造営される。その数は大津市だけでも一千基を優に越える。真野・堅田地域に分布する古墳群は春日山古墳群、曼荼羅山古墳群で、そして志賀町にかけて南船路・金クソ・天皇神社・小野神社・石神・ヨウ・木が谷・石釜古墳群（いずれも2～15基の円墳）の分布する。

『和名抄』によると、真野・堅田地域は滋賀郡の古市・錦部・大友・真野の四郷の内、最も北に位置する真野郷内に所在する。また『新撰姓氏録』には同地に和邇・小野・春日・粟田氏が居住しており、現在でも同地名がこの地区に残る。和邇氏は岸俊男氏によると本拠地が奈良県天理市・本辺りの有力豪族であり、同氏が真野郷を治めていたという可能性は古代において同地が重要視されていたことが伺え、そして春日山・曼荼羅山古墳群は和邇氏の墓域と指摘されている<sup>註2</sup>。その他の少数群集墳の性格は判然としないが、この地域に後世、外国使節に活躍した小野氏が居住したことから、やはり琵琶湖の水運に係る集団であったのだろうか。

真野・堅田地域における横穴式石室の特徴は、片袖長方形プラン・平天井であり近畿一带に分布する横穴式石室の特徴と同じであるが、対して坂本以南に所在する穴太・剣込・大谷・大通寺・百穴・太古塚・福王子古墳群の横穴式石室は両袖式正方形プラン・ドーム状天井および、ミニチュアかまどの出土が注目される。これは、古市・錦部・大友郷に居住した渡来系氏族と真野郷の和邇系漢人氏族問題に大きな影響を与えた。ただし、石神4号墳の石室は天井石が1石のドーム状天井である。飛鳥時代には、古墳の造営は衰退し、寺院が建立される。7世紀の小野妹子の墓と伝えられる横穴式石槨の唐臼山古墳が現在残るのみで、湖西では衣川廃寺が最初に建てた寺である。弥生時代同様、衣川廃寺を建立した集団が古墳時代から連続した集団だと認めるのは困難だが、同廃寺が西羅古墳の下にあることは一考の余地がある。同廃寺は金堂と塔のみしか完成せずに廃絶している。朝廷の庇護が受けられず、建築・土木集団の確保ができなかったためだろうか。

（工藤 基志）

註1 古琵琶湖層群は湖沼や河川の堆積物から構成されており、三重県伊賀上野から湖東・湖西・湖南にかけて分布している。約500万年前に伊賀上野で発生した琵琶湖が徐々に北上し、その間発生と消滅を繰り返しながら130万年前に安定し、現在地にきたことをこの古琵琶湖層群が証明している。

註2 岸俊男「ワニ氏に関する基礎的考察」（『日本古代政治史研究』1966年）

### 第3章 春日山古墳群研究略史

春日山古墳群は1968年に滋賀県教育委員会によって分布調査が行われ、A～Eの5支群で計171基が確認され、湖西でも有数の大規模古墳群であることが判明した。<sup>註1</sup>

丸山竜平氏は近江の古墳群との比較の中で、首長系譜を含みながらも100基をはるかに越える古墳からなる春日山古墳群は特異な存在であると指摘した。<sup>註2</sup>中でも前方後円墳を築造契機とするE支群に注目し、前方後円墳をはじめ石棺直葬墳、木棺直葬墳、横穴式石室墳などの各時期の古墳は同一の首長系譜をひくものと捉えた。そしてA～D支群は首長系譜を含むE支群とは異なる築造契機を持つものとし、その被葬者の社会的地位についてもE支群のそれとは異なるものであったとしている。さらにA～D支群の築造契機となったのは姓としての「部」の付与であり、「部」集団の成立であったとみている。丸山氏はまた、文獻等の面から堅田地域の居住氏族について考察を行い、春日山古墳群の被葬者としてE支群を除いたものについては「和邇部」か「和邇部臣」あるいは「和邇部臣と和邇部」を想定し、E支群については和邇部臣とその一族を想定した。

1979～81年、湖西線建設に伴う沿線の乱開発を未然に防ぐために、大津市教育委員会によって再び春日山古墳群の分布調査が行われた。<sup>註3</sup>167基の古墳が確認され、それらは小丘陵及びそれを形成する谷を基準にA～Fの6支群に分けられた。

その後、京都教育大学考古学研究会は独自の分布調査を行い、新たに50基の古墳を確認し、また古墳とは認められないものも確認している。<sup>註4</sup>そして新たに古墳の位置、規模、現状などの調査・整理を行い、春日山古墳群をA～Gの7支群に分けた。同時にC支群を中心に石室実測、地形測量などを行い、その成果をもとに、群構造の分析を中心にした考察を行っている。

地形測量の行われたC支群からは小さな谷により明確に区分される4つの小グループが抽出された。<sup>註5</sup>いずれの小グループも最高所に比較的規模の大きい中心的古墳を古墳1基もしくは2基を最初期に築き、その周辺に5～15基程度の古墳を墳丘裾を接するように築造するという構造が見られるとした。

このようなC支群における群構造の特質を見出したうえで、春日山古墳群の群構造を築造契機及び分布形態から次の3つの形態に分類している。まずE支群は前方後円墳を築造契機とすることからA～D支群とは基本的に異なる群構造を持つものとした。次に円墳のみで構成されるA～D支群についてはその分布形態からA～C支群とD支群とに分けられるとした。D支群は古墳群中唯一T字プランの石室を有するD-13号墳を中心に尾根上に並ぶように築造されており、いくつかの小グループから構成されるという分布形態を持つA～C支群とは異なる群構造をもつもの

と捉えた。

またこれらの3つの群構造に表れる共同体内の諸関係は異なるものであったとして、それぞれの群構造について横穴式石室を内部主体とする後期古墳を中心に考察している。E支群の横穴式石室墳は他支群と規模における差は見られないが、より多くの墓域を獲得しているという点でその被葬者はA～C支群の被葬者とは異なった階層の人々であったと考えられ、彼等は中期古墳より続く首長層の後裔を主張するグループであると想定した。A～C支群については、構成する古墳間に大きな差異は見出せず比較的均質な集団であったとしながらも、小グループ内の古墳間に墳丘規模、石室規模の差があることから、小グループ内の被葬者には若干の格差が見られるとしている。また、中心的古墳のまわりに裾を接するように古墳を築造するという群構造の形態は「家父長的な古代家族

としてのより新しい小共同体関係」を表出しているものと評価した。D支群については分布形態と墳丘規模がC支群の中心的古墳と同様に大きいものが多いという点に注目し、A～C支群のように中心的古墳以外の古墳の被葬者のようなより下位の集団の台頭が阻まれるという状況が見て取れることから、その被葬者は古い共同体的な性格を持っていたとしている。

このように春日山古墳群には3つの異なる群構造をみることができ、そこから読み取られる共同体内の諸関係もそれぞれ異なっていると捉えたのである。そして、横穴式石室を内部主体とする後期古墳の被葬者は6世紀の中葉前後にこの地で台頭してきた古代家族であり、それらの中には首長墓群の後裔を主張するグループ（E支群）、新たに台頭してくるグループ（A～D支群）があるとした。さらにA～D支群には異なる二つの群構造がみられ、これらの群構造を異にするそれぞれのグループが、前代の前方後円墳の周辺に墓域を近接して築かれ、一つの大群衆墳を形成しているという点が、春日山古墳群の最大の特徴であるとした。また、問題点としてこのような大規模群衆墳の形成を可能にした生産基盤は何であったかということと、大規模古墳群として

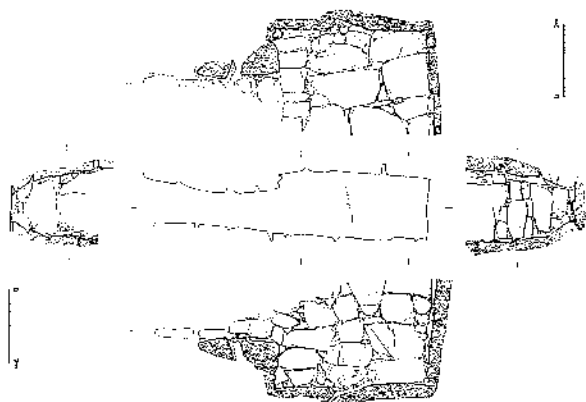


図3 B-16号墳石室実測図(『史想』第22号 1989より転載)



図4 C-25号墳石室実測図(『史想』第21号 1988より転載)

結合させている力は何であったかという2点を上げ、後者に関しては湖上交通の要所である堅田の地において畿内勢力の把握が急速に進められたという背景を想定した。

京都教育大学考古学研究会ではその後、新たにB支群の石室実測を行い、実測図及び石室観察文の報告を行っている。<sup>註8</sup>

1989年滋賀県企画部地域振興室は京都教育大学考古学研究会の参加を得て、古墳群内の県有地の分布調査及び地形測量を行い、新たに12基の古墳を確認している。<sup>註9</sup>また、これまで円墳とされていたE12号墓は地形測量の結果、前方後円墳であることが認められ、春日山古墳群にはE1号墳とあわせて2基の前方後円墳が存在することとなった。

(高橋 あかね)

註1 『第一次宅地造成等規制地域内遺跡分布調査概要報告書』(滋賀県教育委員会 1969年)

註2 丸山竜平「近江和邇氏の考古学的研究」(『日本史論叢』4号 1974年)

註3 「埋蔵文化財包蔵地分布調査報告書」(『滋賀県文化財調査報告書』(2) 大津市教育委員会 1981年)

註4 『史想』21号 京都教育大学考古学研究会 1988年

註5 C-23・28・35・37・38号墳、B-17号墳、D-13号墳の基で行われ、観察文及び実測図の報告がされている。

註6 地形測量は古墳の密集して分布する区域を対象として行われており、C支群全体を対象としたものではない。なお測量範囲内にはC支群で確認された47基中39基が含まれており、群構造に関する考察も測量範囲内の古墳を対象に行われたものである。

註7 F支群については支群とみなすこと自体疑問視され、G支群については古墳数が少なく支群としての特質を見出しがたいとして検討の対象には入れられていない。また、各支群中に数基ながら単独に立地するものについても支群としての特質を示すものではないとして分類上は含まれていない。

註8 B-9・10・16・17・34号墳について行われた。(「大津市真野春日山古墳群石室実測調査報告」『史想』22号 京都教育大学考古学研究会 1988年)

註9 A～Gの7支群で捉えられないものについて、あらたにH、I、Jの3支群を設けて整理している。

『真野谷口町県有地古墳等分布確認調査報告書』滋賀県企画部 1989年

#### 第4章 調査の概要

(仮称)真野谷口公園に伴う大津市真野谷口町春日山古墳群の分布調査は、平成6年2月から3月にかけて実施した。踏査の範囲は県有地および史跡指定地内で、支群では、A支群の北半分、D支群の一部、E支群、G～J支群、となる。また、今回の踏査で新たにK支群を設定することとなった。

A支群：春日山古墳群のやや北よりに位置し、春日山古墳群を後期群集墳とした場合にはB・



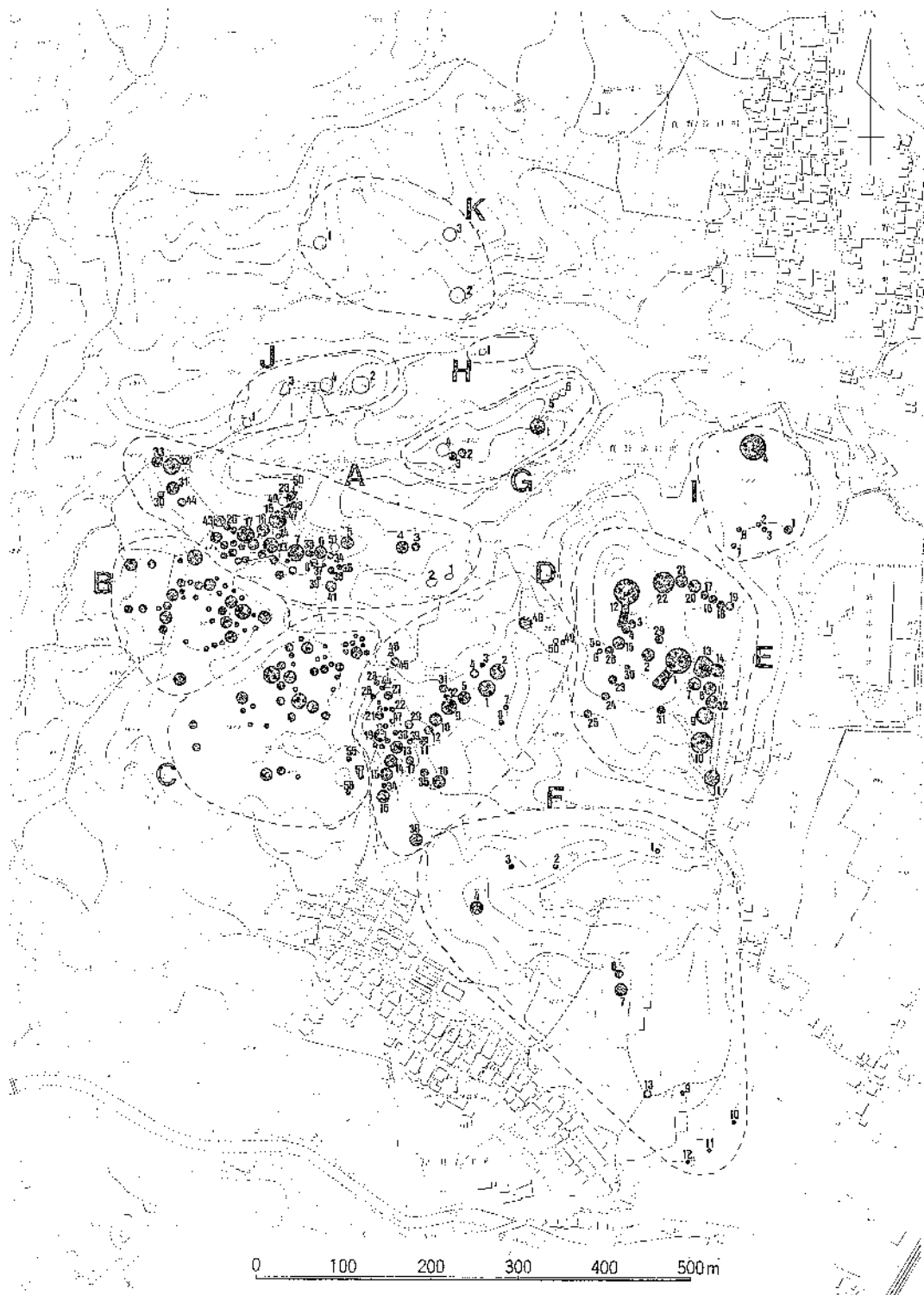


图5 春日山古墳分布图

C・D支群とともに、中心的な位置を占めるものである。調査地内の古墳は22基を数え、今回の調査では新たに5基確認した。開口方向は、磁北を0°として表した。

### A支群

No	墳形	規模(m)		主体部	開口方向※	立地	現状	備考
		直径	高					
1	円?	8	2.2	不明	不明	狭せ尾根上 尾根分岐	古墳状隆起 墳形は判然としない石室も見当らない	尾根分岐の自然地形の可能性大。 地内上では広い尾根上に立地するが、実際は非常に狭せた尾根上に立地する。
2	円?	11	2	不明	不明	狭せ尾根上 尾根分岐	A1と同じ	A1と同じ
3	円墳	10	2.3	横穴式石室	180°	尾根上から南斜面にかけて谷の源頭部	半壊 石室部分崩壊・石材見え ず墳丘北側は流失か	墳丘は尾根の低い側と南の谷側のみ成形か。
4	円墳	16	3	横穴式石室	185°	尾根ピーク上・尾根分岐	ほぼ完存 墳丘北側が流失しているが比較的良好的に依存 石室は現壁と天井石の一部がない他は良く残っている	特になし
5	円墳	15	4.5	横穴式石室	185°	狭い尾根上 尾根の両側は急峻 羨道は全て流失 墳丘東側(尾根の低い方)が一気に低くなる	半壊 墳丘南側は流失 玄室も天井石が内部に落ちこんでいる 墳丘南側に石材散乱	A24からA5までの間は南側が土砂崩れでえぐられており、石材が散乱している。
6	円墳	15	2.5	横穴式石室	175°	尾根上 A35と墳丘西裾を共有	半壊 墳丘は封土がかなり流失 石室部分は陥没しており石材が2石露出	墳丘裾部は現状では3方向を成形していることが確認できる。
7	円墳	19	4	横穴式石室	220°	尾根上 A16より分岐した尾根の最高所	半壊 現道により墳丘北西～南西が削平されている可能性大 石室は天井石1石と奥壁～左側壁約2.5m残存 墳頂部南西(石室側)は封土流失して低くなっている。	石室は左片袖か?
15	円墳	18	4	横穴式石室	175°	尾根上 これより北東は尾根が少し急に低くなってゆぐため礎部ともいえる	ほぼ完存 石室天井部の一部が開口 墳丘の東と北西は現道によって削平されている可能性あり 墳頂部の封土は流失	石室は右片袖 主体部の残存状況非常に良好、計測可能
16	円墳	16	3.3	横穴式石室	200°	主尾根上の尾根分岐点 A15よりも高い位置	半壊 墳頂部は封土流失 羨道部は石材なく、凹地になっており、玄室が開口 半壊としたが墳丘は比較的残存状況は良い	玄室のみ計測可能
17	円墳	18	3	横穴式石室	220°	主尾根上でA16とならび最高所	半壊 玄室部分陥没 天井石のない部分で側石の一部が露出	特になし
24	円墳	長さ11 短さ6	1.5	横穴式石室?	250°	主尾根上 A17の造り出し状	半壊 墳丘やや流失 墳丘南側に石材が1石散落 主体部は不明確	墳丘の形状はいびつな楕円形 A26側(低い方)はよく成形しているが、A17側(高い方)はあまり成形していないように見える
26	円墳	8.5	2	横穴式石室	170°	主尾根上	半壊 石室は崩壊しているが、奥壁および左側壁は天井まで残存しており石室の形状が観察できる少ない例 墳丘は流失が著しい	石室は左片袖 石室計測可能

No	墳形	規模[m]		主体部	開口 方 向	立地	現 状	備 考
		直径	高					
28	円墳	12	3.4	横穴式 石室	140°	主尾根上の尾根分岐点	半壊 墳丘南東半が現道に削平 されており、道路法面に羨道と 思われる部分が露出 墳丘北東斜面に石材が散乱 墳丘北→東にかけては封土の流 失が著しいが、裾部ははっきり している	尾根の高い方はあまり成形してい るようには見えない。 道路法面で墳丘及び石室掘り方の 断面観察可能 道路法面はすでにオーバーハング しており、現在も少しずつ崩壊し ているため、なんらかの対策を講 じる必要あり。そのまま放置する と全壊してしまうことも考えられ る。
32	円墳	20	4.5	横穴式 石室	180°	┌支群に伸びる主尾根 の最高所かつ尾根の分 岐点	半壊 墳丘北半とともに石室の 玄室部分約1/2が流失 墳頂部の封土も石室部分を中心 に流失しており、玄室の天井石 のない箇所から内部を観察でき る。 羨道部分は土砂が被っており不 明であるが、石材が数石露出し ている。	A33とは尾根を切断成形して区別 しているのがよくわかる。 玄室は内部に土砂が流入しており 天井に近い部分のみ計測可能。
33	円墳	13	3	横穴式 石室	270°	┐支群に伸びる主尾根 の最高所 A支群の最も北西に立 地	半壊 石室は数石を残し流失 か？ 墳丘も西半の石室部分を中心に 流失 主体部は陥没しており、土砂が 流入している。	墳丘範囲を明示する杭は現道側の み設置
35	円墳	9	1.2	横穴式 石室？	不明	尾根上 A6に少し食い込むよ うな形で立地	ほぼ完存 墳丘は判然としな いが、尾根の低い方と両側を成 形している	主体部やその痕跡らしきものも見 当らない
43	円墳	13	1.4	横穴式 石室	210°	主尾根上	ほぼ完存 主体部陥没 石材は見当らない	現道は墳丘裾部より1m西側を 通っている。
47	円墳	11	3.2	横穴式 石室	160°?	主尾根上	半壊 墳丘の北西と南東は現道 に削平されている 石材が2石露出 主体部陥没 尾根の高い方はA15の裾部で両 古墳を区別している。	新規 A47・48は現道建設の際に墳丘を 大きく削平されている。 A15・47・48は尾根の低い方を成 形して連続的に造られている。
48	円墳	9	2.6	横穴式 石室	160°?	主尾根上	ほぼ全壊 A47と同様 ただし石材はない	新規 A47と同様
49	円墳	12	1	横穴式 石室？	不明	A15等のある主尾根の 西側斜面	ほぼ全壊 墳丘の南東を現道に 削平されている 墳丘封土もほとんど流失 石材が散乱	新規 古墳状隆起の可能性あり。 散乱している石材は尾根上のA47 もしくはA48のものであるかもし れない。
50	円墳	8	1.5	不明	不明	主尾根上	ほぼ全壊 現道に東半分と北西 部を削平 A28との境に尾根を切断成形し た痕跡が見える 墳丘封土はほとんど流失 主体部の痕跡や石材は見当らな い	新規 古墳状隆起の可能性あり

No	墳形	規模(m)		主体部	開口 方 向	立 地	現 状	備 考
		直径	高					
51	円墳	10	1.5	横穴式 石室?	180°?	尾根上	ほぼ全壊 墳丘の南2/3程度が 土砂崩れで流失 残存部分の裾部の成形はよく 残っている	新規 両隣のア5・34が当古墳と同様に 内側が崩落流失している。そのた め当古墳も石室などがすべて流失 して、墳丘北側だけ残存したもの と判断した。

D支群：E支群の北西に位置し、総数50基の古墳が現存している。横穴式石室が密集して築かれているが、調査地内には今回新たに確認した2基を含む3基の古墳が存在する。新規発見の2基は地形上ではE支群からD支群にむかって派生する尾根のE支群側に位置しているが、E支群は史跡地内の古墳に限られるため、D支群とした。

#### D支群

No	墳形	規模(m)		主体部	開口 方 向	立 地	現 状	備 考
		直径	高					
48	円墳	13	3	木棺 直葬?	—	D～E支群間の主尾根 上 鞍部より少し上がった ピーク上かつ尾根の分 岐点	ほぼ完存 墳丘裾部はいずれの 方向もはっきりしないが、北側 裾部は比較的明瞭 裾部の大半は流失か?	古墳伏隆起の可能性あり。
49	円墳			横穴式 石室		D～E支群間の主尾根 の南斜面	ほぼ全壊 主体部陥没 石材1石あり 墳丘は流失が著しいが、辛うじ て裾の成形がわかる	E支群により近い 新規
50	円墳			横穴式 石室?	不 明	D～E支群間の主尾根 の南斜面 D49の上	古墳伏隆起? 墳丘北西側が山道によって削平 主体部や石材は見当たらない	墳頂部が丸く盛り上がっているた め横穴式石室の古墳ではないか? 新規

E支群：当支群が国指定史跡である春日山古墳群で、I支群と並んで琵琶湖と堅田平野が見渡せる好位置を占めている。木棺直葬と考えられる前方後円墳・円墳、箱式石棺を主体部に持つ円墳、横穴式石室を内部主体にもつ円墳が支群内に混在している。今回は新たに13基の古墳を確認した。

#### E支群

No	墳形	規模(m)		主体部	開口 方 向	立 地	現 状	備 考
		直径	高					
1	前方 後円墳	前 28 後 27	前 2.5 後 5	木棺 直葬?	—	尾根鞍部のピーク上 後円部を平野および琵琶 湖湖に向ける	ほぼ完存 墳丘東側が現道に よって削平されている 後円部頂に主体部と思われ部分 の陥没あり	くびれ部から前方部にかけては紛 糾がやや流失しているのか幅が狭 くなる。 柄鏡塚の前方後円墳か?
2	円墳	12	2.7	横穴式 石室	250°	谷最奥左岸尾根上 主尾根と支尾根の分岐	半壊 石室部分陥没し、石材露出 墳丘の北東裾部は現道で若干削 平か 墳頂部の封土流失は著しい	墳丘の北東裾部の現道幅は要注 意
3	円墳	13	1.3	横穴式 石室	110°	広い尾根上 E12の南西隣 E12の前方部を若干切 り込んでいるのか?	ほぼ全壊 玄室4石と羨道1石 は基礎石として残存 墳丘はほとんどが流失している が、裾部が若干残存している	石室は左片袖か?

No	墳形	規模(m)		主体部	開口方向	立地	現状	備考
		直径	高					
4	円墳	11?	-	横穴式石室	180°	E3と同様	全壊 礎底石が2石残存 墳丘はほとんどが流失して原形を留めない	
5	円?	-	-	横穴式石室	240°	尾根の斜面(谷に近い)	全壊 石材が5石露出しているが、石室として考えられるのか、散在している状況なのかは判断できない 墳丘は確認できなかったが低い方に若干の成形痕が見える	特になし
6	円?	-	-	横穴式石室	240°	尾根の斜面(谷に近い)	全壊 石材が3石露出している。 ほかはA5と同様	特になし
7	円墳	16	2.5	横穴式石室	165°	尾根上 E7・8・9・13・14・32の中で最も高い 拉磨 琵琶湖方面の眺望よし	ほぼ半壊 墳頂部の封土の流失は著しい 玄室の天井石4石が露出し石室内部が見える 墳丘北北西側は現道により削平	
8	円墳	16	2.5	横穴式石室	160°	尾根南西斜面 E7の直下 琵琶湖方面の眺望よし	半壊 墳頂部の封土および墳丘裾部の流失は著しい 天井石4石露出、天井石1石と側石2石転落	斜面の低い方のみ成形痕残存
9	円墳	20	4	横穴式石室	140°	広い尾根の南西端から斜面にかけてE7とは少し離れるが、E32とは接する 琵琶湖方面の眺望よし	ほぼ完存 墳頂部の封土および墳丘南斜面は流失しており、墳丘の高い方の成形が判然としない 石室は天井石が3石露出 石室内部も見える 石室の残存状況は良好	尾根上に位置しながら尾根の南～北西側の斜面を成形している。
10	円墳	長 34.5 短 25.5	4 6	木棺直葬?		尾根上 先端に近い 琵琶湖方面の眺望よし	ほぼ半壊 墳頂部は平坦 尾根の高い方と平野側は成形しているが、谷側では痕跡が認められない 平野側では法面工事で1/3程度は削平か?	墳丘の南西～東にかけては平坦面が2か所あり、そのどちらを墳丘裾部にあてるのかは現地の地形観察のみでは判断できなかった。そのため墳長は2つ計測した。測量調査などで判断すべき。
11	円墳	19	3	箱式石棺	主軸方向 225° -45°	尾根上 先端に近い 琵琶湖方面の眺望よし	半壊 墳丘の流失は著しいが平野側の成形痕は確認できる 墳頂部に箱式石棺露出	箱式石棺には灰石はないと思われる。敷石が礫床であろう。
12	前方後円墳			木棺直葬?		主尾根上 墳丘の余体を琵琶湖・平野部に向けている 眺望よし	ほぼ完存 平野側は後円部からくびれ部にかけての成形痕はよく残っているがくびれ部から後円部にかけての成形痕は封土が流失しているのか判然としない 山側は後円部の成形はよくわかるが後円部は成形していなかったようである 後円部端も成形痕は判然としない	墳丘復元に關しては測量および試掘調査などでの検討を要する。
13	円墳	24	2.3	横穴式石室	180°	尾根上 E7より1段低い 琵琶湖方面の眺望よし	半壊 墳頂部は削平によって平坦化 墳丘は西側約1/3は現道によって削平 残存部の墳丘裾部は良く残っている	

No	墳形	規模(m)		主体部	開口 方向	立地	現状	備考
		直径	高					
14	円墳	14?	不明	横穴式石室	不明	尾根南東斜面 E13の南東下	全壊 墳丘は全て流失 墳丘南東側は道路法面にて削平 長楕円形の凹地がありその中に 石材1石あり 墳丘南南東斜面にも石材1石あり	
15	円墳	15	2	不明	不明	支尾根上 E12から1段下がった所	古墳状隆起? 墳丘の成形痕は良くわかるが石 材は見当たらない	特になし
16	円墳	10	1.7	横穴式石室	150°	尾根南斜面 E17の東隣	半壊 墳丘範囲は判然としない が石室部分が陥没している ボーリングの結果石材らしきも のに当たっている	新規
17	円墳	10	1.8	横穴式石室	150°	広い尾根の南端から南 斜面にかけてE16の東 北東約10m	半壊 墳丘は南斜面を成形して いるのがよくわかる 墳頂部の封土は流失 石室部分が陥没し石材露出	新規
18	円墳	11	2	横穴式石室	170°	尾根南斜面 E19の西10m	半壊 墳丘は南斜面を成形して いるのがわかるが流失が著しい 石室部分が陥没しており奥壁と 袖石が露出	当初15であったがE支群からの 尾根に立地することからE支群に 含め、E18と改称した。
19	円墳	11	1.7	横穴式石室	190°	尾根南斜面 E18の東10m	半壊 墳丘は西斜面を成形して いるのがわかるが流失が著しい 石室部分が陥没しておりボー リングで石材を確認 左端の石材が露出	E18と同じ理由で16より改称
20	円墳	14	1.8	木棺 直葬?	—	E12より派生する平野 向きの主尾根上	古墳状隆起? 墳丘の南西側が突出か 尾根の低い方から側面の成形痕 がよくわかる	新規 E23より連続的に尾根の低い方を 成形して造られている。 E21との境に石材が1石あり
21	円墳	13	1.3	木棺 直葬?	—	E12より派生する平野 向きの主尾根上	古墳状隆起? E20と同様	新規 E20と同様
22	円墳	27	2.5	木棺 直葬?	—	E12より派生する平野 向きの主尾根上	古墳状隆起? 墳頂部はやや平坦だが墳丘は全 体的に良く残っている 他はE20と同様	新規 道路工事要注意 現在にいたるまでE20～23は確認 されなかったが、墳丘らしき 成形痕がよくわかるため、横穴式 石室築人以前の古墳の可能性が高 いと思われる。
23	円墳		2.5	横穴式石室	250°	支尾根と小尾根の分岐 谷最奥部	半壊 墳頂部の封土は流失して おり、墳丘全体もやや流失して いるが原形は留めている 石材が3石露出	新規
24	円墳			横穴式石室	220°	E23と同じ小尾根上 E23よりも下	半壊 墳丘はやや流失している が原形は留めている 石室部分陥没 石材は墳丘外に転落	新規
25	円墳	10	1.5	不明	—	主尾根東側斜面 谷底に近い	古墳状隆起? 墳丘はやや流失しているがほぼ 原形は留めており、斜面の低い部 分を成形しているのがよくわかる 石材は見当たらない	新規

No	墳形	規模(m)		主体部	開口方向	立地	現状	備考
		直径	高					
28	円墳	12		横穴式石室?	220°?	支尾根上 E15の下	ほぼ全壊 尾根を円形に成形し削り出しているように見える 墳頂部は削平され平坦化 石室部分が陥没しており墳丘下方に石材が3石転落	新規 地形の改変をうけた平坦地と平坦地の段差の部分に幸うじて残存している。
29	円墳	9	2.5	横穴式石室?	不明	広い主尾根の北東端から斜面	半壊 斜面の低い方を成形しているのが良くわかる 石材が1石露出 墳丘の北東側は道路法面にて削平か?	新規
30	円墳	8	2	横穴式石室	180°?	主尾根からE23に向かう尾根の西斜面	ほぼ全壊 石材3石あり 1石は元位置か? 斜面を円形に成形しているのがよくわかる	新規
31	円墳	12	2.5	横穴式石室	180°?	E1の前部から南に伸びる尾根上	半壊 斜面の低い方を成形しているのが良くわかる 墳頂部封土は流失 天井石と思われる石材2石露出 墳丘中央部の凹みにも1石露出	新規 藪の中のわかりにくい所にある
32	円墳	13	3.3	横穴式石室	不明	尾根の南東斜面 E8とE9の中間にある墳丘は接する	ほぼ全壊 墳丘は流失が著しいが幸うじてE8とE9と接する部分を成形しているのがわかる 石材は天井石らしき巨石1石とそのほか2石が散在	新規

G支群：過去の調査では3基の円墳が確認されていたが、今回の調査で新たにもう3基マウンドを確認できた。これらはいずれも石材等は確認できなかったため、古墳状隆起としたが、木棺直葬墳である可能性は捨てきれない。

#### G支群

No	墳形	規模(m)		主体部	開口方向	立地	現状	備考
		直径	高					
1	円墳	18	5	横穴式石室	120°	尾根ピーク上より南東に伸びる支尾根上 ピークより支尾根に一段下がった所	半壊 石室開口しているが羨道は全壊、玄室は天井石2石分残存 墳頂部は封土が流失しているが、尾根の高い方の成形は非常に良好 尾根の低い方は流失および削平が著しい	
2	円墳	10	1.5	横穴式石室	160°	主尾根南斜面 G3と接する	ほぼ全壊 天井石はないが石室は基底部に近い部分が残存 墳丘はほとんどが削平されている	石室は瓦片袖
3	円墳	11	3.5	横穴式石室	180°	主尾根南斜面 平坦な広い尾根の南端部より斜面にかけてG2と接する	ほぼ完存 天井石と思われる石材が1石露出 墳頂部は封土の流失が著しいが、墳丘は低い方を成形しているのが良くわかる	ピンボールで主体部を突くと石材にあたる。 現在見えているのは天井石の一部と思われ、さらに南側に石材が埋存している模様。 このことから石室の依存状況は良好と思われる。

No	墳形	規模(m)		主体部	開口 方向	立地	現状	備考
		直径	高					
4	円墳	15	3	不明	—	主尾根上 G3の北西隣で接している	古墳状隆起? 墳丘は良く残っている G3との接点の成形が特に良くわかる 南東～西を成形している 石室は確認できない	新規 古墳状隆起にしたが、木棺直葬墳の可能性あり
5	円墳	8	2	不明	—	主尾根上 尾根の先端部 G6と接している	古墳状隆起? 墳丘裾部は谷幅が不明瞭である が尾根とは尾根を切断成形している 痕跡らしきものが明瞭である 石室は確認できない	新規 古墳状隆起にしたが、木棺直葬墳の可能性あり
6	円墳	8	2.8	不明	—	主尾根上 尾根の先端部かつ尾根 の分岐点 G5と接している	古墳状隆起? G5と同様であるが、尾根の低い 方の成形がやや不明瞭	新規 古墳状隆起にしたが、木棺直葬墳の可能性あり

H支群：今回の調査では新たな古墳は確認出来なかった。石材の露出などが無いため、従来からの指摘通り、古墳状隆起としたが、北側半分は円形に整形しているように観察出来るため、規模の小さな木棺直葬墳とも考えられる。

#### H支群

No	墳形	規模(m)		主体部	開口 方向	立地	現状	備考
		直径	高					
1	円墳	8	2	不明	—	主尾根のピーク上 J支群より伸びる主尾 根が低くなり再び大き く盛り上がったピーク 上	古墳状隆起? 南側がかなり削平され垂直の壁 になっている 一応円形に成形しているように 見える	古墳状隆起の可能性が高いが、木 棺直葬墳の可能性も捨て切れな い。

I支群：E支群の北側丘陵一体に広く分布している。前回の調査で確認されたI5号墳・6号墳は国指定史跡内に立地しているため、今回E18・19号墳とあらため、5・6号墳は欠番となった。

#### I支群

No	墳形	規模(m)		主体部	開口 方向	立地	現状	備考
		直径	高					
1	円墳	9	1.5	横穴式 石室	200°	非常に幅の広い東西方 向の尾根の南南西端か ら斜面にかけて	半壊 石室は比較的良く残っているが、 天井石は全てなく奥壁もない 羨道は土砂流入のため良くわか らない 墳丘は尾根斜面の低い方を成 形しているのがわかる	露出している石室の東側墳丘表 面に拳大～5cm程度の角礫・円礫 が密集している 石室は無軸か
2	円墳	8	1.5	横穴式 石室	145°	非常に幅の広い東西方 向の尾根の南斜面	ほぼ全壊 石材多数あり (露出しているものと転落して いるもの) 墳丘は大部分が流失して石室部 分のみ残存している模様	特になし



No	墳形	規模(m)		主体部	開口 方向	立地	現状	備考
		直径	高					
3	円墳	8	2	横穴式石室	170°	E2の南南東下方の斜面	全壊 石材は全て流失しているが石材のない掘り方のみが主体部の痕跡を残す 前庭部に天井石らしきものあり 墳丘は大部分が流失	特になし
4	円墳	33	4.5	木棺直葬?	—	主尾根先端部 琵琶湖・曼陀羅山・比良方面の眺望が非常に良い	ほぼ全存 墳丘の北側は法面工事で削平 墳丘の東～南西側もかなり流失し急斜面になっているが全体的に残りは良い	墳丘復元に際しては要調査 墳頂部の北西端に近い箇所に凹地あり
7	円墳	—	—	横穴式石室	100°?	E～I支群主尾根の南南東斜面 現在では旧水田面	全壊 石材が1石露出 原位置より動いていないかは不明 墳丘らしきものは全く確認できない	谷水田開削時に主尾根斜面を削っている可能性大。 その時点で主尾根南斜面に存在したと思われる古墳のほとんどが削平されているのを考え、旧谷水田内を詳細に見たが、散乱石材等は発見できなかった。
8	円墳	8	2	横穴式石室?	180°?	主尾根南斜面	ほぼ全壊 主体部露出 石材は見当たらない 墳丘は流失が著しいゆえうじて東および西側の成形痕が確認できる	新規

J支群：これまでの調査で3基の円墳の分布が確認出来ていたが、今回の調査でさらにもう1基増え、計4基となった。

#### J支群

No	墳形	規模(m)		主体部	開口 方向	立地	現状	備考
		直径	高					
1	円?	9	2	不明	不明	尾根上の斜面	古墳状隆起? 想定墳丘部北側は谷地形で急勾配、南側は既設道路により削平されている。	
2	円?	20	2	不明	不明	主稜端、J-4の東約30m	古墳状隆起? 墳頂部は平川 想定墳丘部とその周辺には石材等は見当たらない。墳頂部に凹みもない。	
3	円?	長径 20 短径 8	1	不明	不明	主稜と尾根との分岐点で隆起している	古墳状隆起? 支尾根との分岐点で突如隆起している。 石材等は見当たらない。	
4	円?	15	2	不明	不明	J支群尾根の最高地点	古墳状隆起? 想定墳丘部とその周辺には石材等は見当たらない。 墳丘北側は一部崩落 墳丘南側と既設道路との間は溝状に低くなっている	新規

K支群：今回の調査で新たに発見した古墳をひとまとめとして設定した支群である。合計3基確認したが、いずれも石材や墳頂部に落ち込み等は見られず、木棺直葬墳あるいは古墳状隆起と考えられる。

#### K支群【新規】

No	墳形	規模(m)		主体部	開口 方向	立地	現状	備考
		直径	高					
1	円墳	12	2	不明 木棺 直葬?	—	主楼より南にのびる大きな支尾根上 J支群との間の谷筋より琵琶湖方面の展張良 い	古墳状隆起? 墳丘の南・西・北は成形しているのがよくわかるが、東側は谷斜面となっており崩落も見られる。	新規 墳頂に“新規3”の杭あり
2	円墳	17	3.5	不明 木棺 直葬?	—	大きな尾根先端部 墳頂部は平坦、つ尾根の分岐点	古墳状隆起? 墳丘部は平坦、墳丘裾・斜面は南～西はよく残っているが、南から東は崩落により崖状になっている。尾根上方にもかう墳丘北側は成形痕は見られない。	新規
3	円?	14	3	不明 木棺 直葬?	—	主楼より南にのびる支尾根の最高所より少し下がったところ	古墳状隆起? 墳頂部はほぼ平坦。南東側(琵琶湖側)の成形痕はよくわかるが、南～西は崩落のためか墳丘斜面・裾とも不明確	新規

以上が各支群ごとの概要である。今回の分布調査では28基の古墳を新たに確認することができた。その中には、木棺直葬<sup>註1</sup>の可能性があるものが多数含まれる。

また古墳以外の遺構では、E12号墳の北側尾根、琵琶湖と緊田平野が見渡せる位置にテラス状の平坦地を確認した。尾根筋等、周囲の地形を見ると人工的に成形したものと考えられる。

(大崎 康文)

註1 その根拠は、若干のマウンドを持つが石材や石材の抜き取りなどは見られないという地表面の観察のみである。

## 第5章 考 察

### 第1節 E12号墳について

#### a) はじめに

本調査において得た成果の中で最も大きなものとしてE12号墳が前方後円墳であると確認したこと、および墳丘測量調査による地形図の作成が挙げられる。

E12号墳は前々回の調査では円墳と、前回の調査では前方後円墳であることが推測されていた<sup>1</sup>のであるが、今回その推測をさらに推し進めて当古墳が前方後円墳であることを確定させ、さらにこの古墳の性格について若干の私見を述べてみたい。

#### b) E12号墳の概要

まず当古墳の概要を述べつつ前方後円墳であることを確認してゆく。

春日山古墳群は大きく9支群に分けられるが、そのほとんどは古墳時代後期の横穴式石室を主

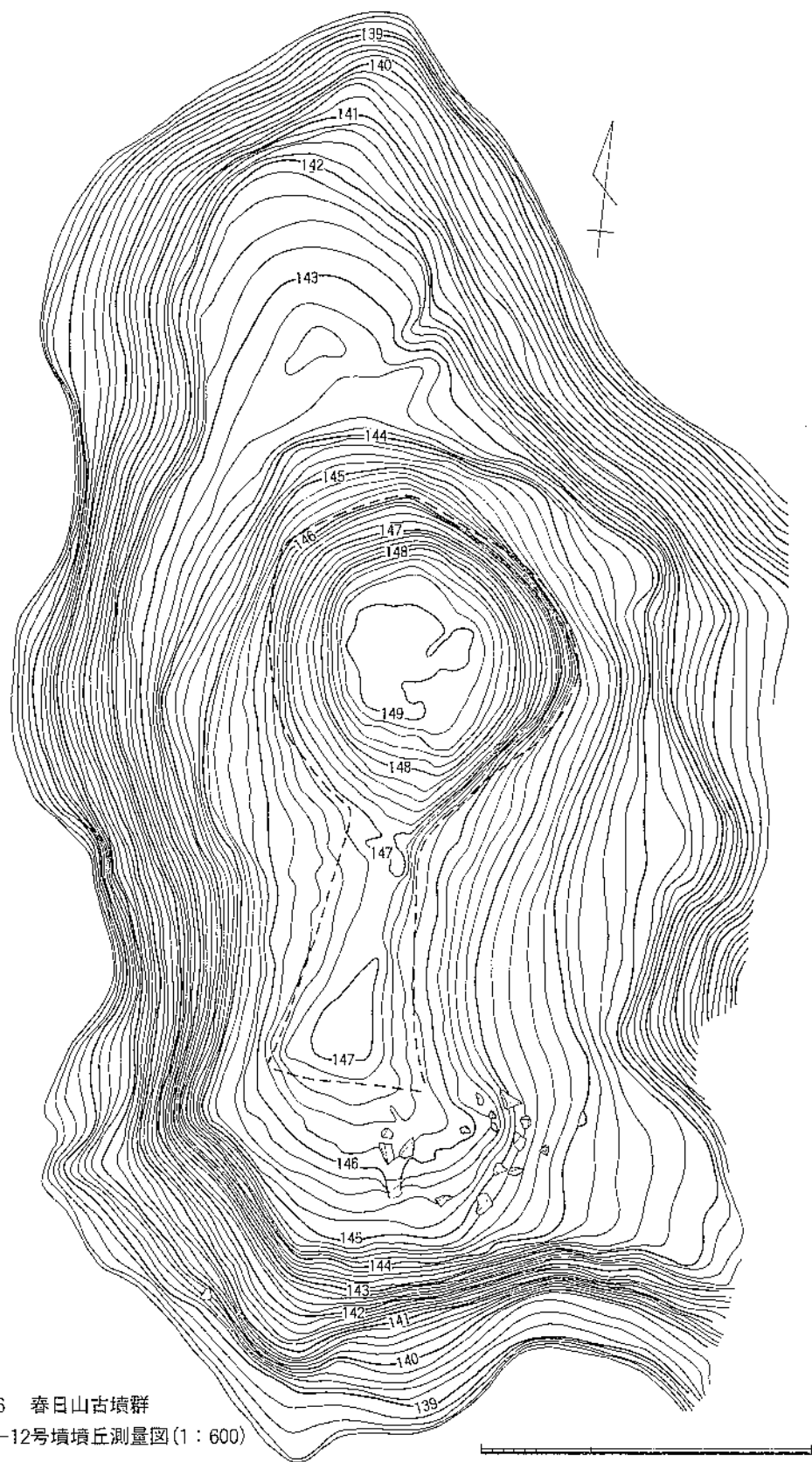


图6 春日山古墳群  
E-12号墳墳丘測量図(1:600)

体部に持つ小円墳が一群をなす群集墳から成っている。その中でもE支群は既に前方後円墳として知られているE1号墳（春日山古墳）や、木棺直葬の円墳等が群集墳造営以前より営まれている点で特異な支群である。ここで取り上げるE12号墳もまたE支群中にあり、E1号墳（春日山古墳）の西約100mに位置する。

さてそれでは図6を参照しながらE12号墳の細部を見てみよう。図6のコンターラインを見れば北東側（琵琶湖および堅田平野側）で特に地形を前方後円形に整形している様子が看取される。しかし前方部端に近くなるにつれその整形した痕跡は判然としなくなるが、これは前方部端面に近い位置に2基の横穴式石室を主体部に持つ円墳が後世に造営され地形が改変を受けていることにも影響されていると思われる。しかし他の古墳においても前方部端のはっきりしない例もあることから一概には言えない。この事から前方部端面および基底部も判然としない状況であるが、南西部コーナーが現地観察より若干残存している事が確認できたため前方部端を確定することができる。前方部端の幅は5.4m、前方部端基底部幅は14.8m、高さは0.7mとなる。また前方部端面に近い部分はいくびれ部に近い部分よりやや高くなり、前方部端での高さは1mになる。くびれ部も北東側でははっきりと確認できるが南西側（山側）では北東側ほどはっきりとしない。くびれ部幅は頂部で3.4m、基底部で7mである。後円部は前方部と比べて非常に高さもあり、その成形は判然としている。墳丘北東側から北側にかけてはくびれ部から続く基底部のラインがテラス状になっており裾部が非常に捉えやすい。北側から北西側にかけては徐々にその裾部が判然としなくなりくびれ部へと続く。後円部頂部は平坦であり直径は14.4m、基底部の直径は28.4m、高さは3mである。

以上のように当古墳の細部を順を追って見たわけである。前方部の認定が難しいところであるが先述のような状況であり、かつ測量図のコンターラインから見れば前方部と判断するべきであろう。このような状況よりやや舌足らずではあるが、幅が狭く端部がややバチ状に開く前方部を持つ墳長53.6m、主軸方向をN16°Eにとる前方後円墳であることが理解できる。

それではE12号墳を前方後円墳であることを認めたくえでその特徴を見てゆこう。

当古墳はE支群中で最も高い尾根上にあり、また琵琶湖および堅田平野方面の眺望が非常にすぐれており、平野側からは古墳を真横より見ることができることが非常に大きな特徴といえる。これまで見てきたように当古墳は琵琶湖および堅田平野側を非常に意識して成形していることは確かである。また地形測量図や現地観察によると墳丘の北東側斜面は周りの地形に比べて急峻になっていることから、墳丘を強調させるために地形を改変させている可能性がある。

墳形は先述のとおり、前方部は幅が狭く端部がやや開く形で、かつ前方部端はやや高くなる。後円部は前方部に比べて非常に高く、墳頂部は平坦である。墳丘の段築は見られずまた埴輪もしくは葺石などの外表施設も表面観察では確認できなかったが、後円部裾が犬走り状のテラスになっていることは当古墳の特徴として挙げられるであろう。

#### c) E12号墳の築造年代

E12号墳が前方後円墳であることは確認したが、次にその築造年代が問題になってくるであろう。当古墳は当然のことながら発掘調査は実施しておらず、表採遺物もない。そこで墳形および

墳丘の成型方法を主眼に他の前方後円墳と比較することより築造年代を検討してみよう。

当古墳はその墳形から新しい様相は見出せない。むしろ前方部の形状や前方部より後円部が倍以上の高さを持つこと等より古墳時代前期の前方後円墳の特徴を備えていると言ってもよいであろう。近江における前方後円（方）墳で前期古墳に位置付けられているものは大津市皇子山1号墳・膳所茶臼山古墳・春日山E1号墳・和邇大塚山古墳、安土町安土瓢箪山古墳、八日市市雪野山古墳、湖北町若宮山古墳等が挙げられる。細川修平氏はこれら近江の前期前方後円墳を60m前後の中型のもの<sup>3</sup>と100mを越える大型のもの<sup>3</sup>の2類に分類し、立地等からその各々がもつ意味（被葬者像や造墓集団等）に相違点を見出している。その研究成果に立脚すれば春日山E12号墳は中型前方後円墳の範疇に入ることから、ここでの比較の対象は先述の古墳のうち大型の範疇に入る膳所茶臼山古墳と安土瓢箪山古墳は除外せねばならない。

さて春日山E12号墳は先述のように墳丘の成形にその特徴がある。すなわち見せる側を丁寧<sup>3</sup>に成形する点、前方部端が判然としない点である。この特徴は他に皇子山1号墳・雪野山古墳で見られる。

皇子山1号墳は大津市西部の皇子山に位置する墳長60mの前方後方墳で、平野部を見下ろす丘陵上に立地する。この古墳もまた東側（琵琶湖側）の成形が丁寧<sup>3</sup>で葺石を持っているが、山側の成形が判然としないのである。時期は墳形や後続する同2号墳の年代観より古墳編年のⅡ期に位置付けられている。

雪野山古墳は八日市市と竜王町にまたがる独立丘陵である雪野山山頂に立地する墳長70mの前方後円墳で、竪穴式石室の主体部より船載三角縁神獸鏡・大型仿製鏡・琴柱形石製品・鍬形石・小礼革綴冑等が出土しており、副葬品のセット関係より古墳編年のⅢ期に位置付けられている。この古墳もまた湖東平野（蒲生郡）を見下ろす好位置にあり、特に北西側の成形を丁寧<sup>3</sup>にしているようである。前方部端部もはっきりとしないようであるが、発掘調査によって葺石が検出されたことによって確定されている。墳丘のトレンチ調査でも北西側（近江八幡市側）の裾部ははっきりと検出されているが、南東側（竜王町側）では判然としないことが確認されている。

また和邇大塚山古墳も現地における地形観察では平野側の成形が顕著であるように思われる。

これらの古墳の見せる側をより丁寧<sup>3</sup>に成形する手法は近江に限らず、前方部が高さを持つようになる中期古墳以後には通常見られない特徴であることから、春日山E12号墳もまたこの時期の古墳として捉えることができるであろう。これは当古墳の墳形からの時期判断とも大筋では矛盾<sup>3</sup>しない。

またいま一つの特徴として前方部が非常に低く、後円部の墳丘裾部に犬走り状のテラスを持つことが挙げられる。都出比呂志氏は地上にそびえる高い古墳とは別に低い墳丘の古墳があるとし、それを低墳丘古墳と呼称することを提唱している。低墳丘古墳は段築や葺石がなく周溝と墳丘裾テラスを持つとし、テラスを持つものは特に古墳時代初期のものが多くを指摘している。そしてこの特徴を弥生時代終末期の墳丘墓に起源を求めているのである。春日山E12号墳もまたこの特徴の一部が見られ、低墳丘古墳の特徴すべては備えていないものの、近隣の春日山1号墳や葺石を備える和邇大塚山古墳と比較すると墳丘は明らかに低く、また後円部裾のみであるがテラ

スを備えている。このことから当古墳に古式古墳の特徴を見ることができるのである。

#### d) E12号墳の性格

前項および前々項でE12号墳が古墳時代前期の前方後円墳であることを確認することができた。ここでは古式前方後円墳である当古墳の歴史的位罫付けを、特に同じ堅田平野を望む位置にある和邇大塚山古墳・春日山E1号墳等と関連させて考えてみよう。

#### イ) 春日山古墳群E支群の概要

まずE1号墳・E12号墳のあるE支群の特徴を述べ、4世紀から5世紀にかけての当支群の変遷を考えてみたい。

これまでの分布調査の結果ではE支群はE1号墳の築造が契機となって、木棺直葬の主体部を持つと考えられている円墳のE10号墳と箱式石棺を主体部に持つ円墳のE11号墳が相次いで造営されると考えられてきた。しかし今回の調査によってE12号墳から北東に伸びる尾根上に木棺直葬の主体部を持つと考えられる円墳が新たに3基発見された。この事実を踏まえて春日山古墳群における群集墳造営以前の状況を知ることは、非常に重要な意義を持つものと考えられる。

当支群はまず前方後円墳である1号墳もしくは12号墳の造営が契機となって形成されることは首肯されるであろう。12号墳は先述の通りであるが1号墳の詳細および築造年代はどうか。1号墳は12号墳の南東約100mの尾根上に位置し、主軸をN135°Wにとる。墳長は60m、後円部は直径32m・高さ6m、前方部は幅20m・長さ30m・高さ3.5m、くびれ部は幅約18mを測る。前方部はくびれ部より直線的に端部に至り、ほとんど開かない所謂柄鏡形を呈する。後円部頂部は平坦でほぼ中央部には盗掘坑があるが、主体部は不明である。また葺石や埴輪などの外表施設もないようであり詳細な時期は不明であるが、古墳編年ではⅢ～Ⅳ期に位置付けられており、従来からも4世紀末から5世紀初頭にかけての時期に比定されている。そこで2基の古墳の前後関係を墳形および立地から見てみよう。墳形であるが1号墳は所謂柄鏡形の前方後円墳であるのに対して、12号墳は前方部がバチ形に開く前方後円墳である。通常の場合墳形から見ると12号墳が1号墳よりも古くなるであろうが、柄鏡形の桜井茶臼山古墳とバチ形の西殿塚古墳が近接した地域でほぼ同時期に築造されている例もあることから決定的な要素にはならない。では立地はどうか。12号墳は1号墳より標高が高い位置にあり、かつE支群の最高所に立地している。また12号墳は墳丘の側面を平野側にまともに向けているが、1号墳は地形の規制によって墳丘側面をやや山側に向ける。最初に築造される古墳が最も条件の良い場所に占地するのが一般的であるという前提が成り立つなら、E支群は12号墳の造営が契機となり次に1号墳が造営され、さらに円墳である10・11・20・21・22号墳が続くということが言える。先学の成果に従うと1号墳が4世紀末から5世紀初頭に位置付けられていることから、それより古いと考えられる12号墳は4世紀中葉から後葉に造営され、次いで1号墳が、さらに5世紀前半から群集墳造営が開始される6世紀後半までの約150年間には5基の円墳が相次いで造営されたものと考えたい。

#### ロ) 堅田平野をめぐる前期古墳の動向

さて春日山古墳群の前中期の様相が把握できたところで、和邇大塚山古墳を含めた堅田平野の前期古墳の動向を検討してみよう。堅田平野とは北は曼陀羅山、南は雄琴の丘陵に挟まれた地域

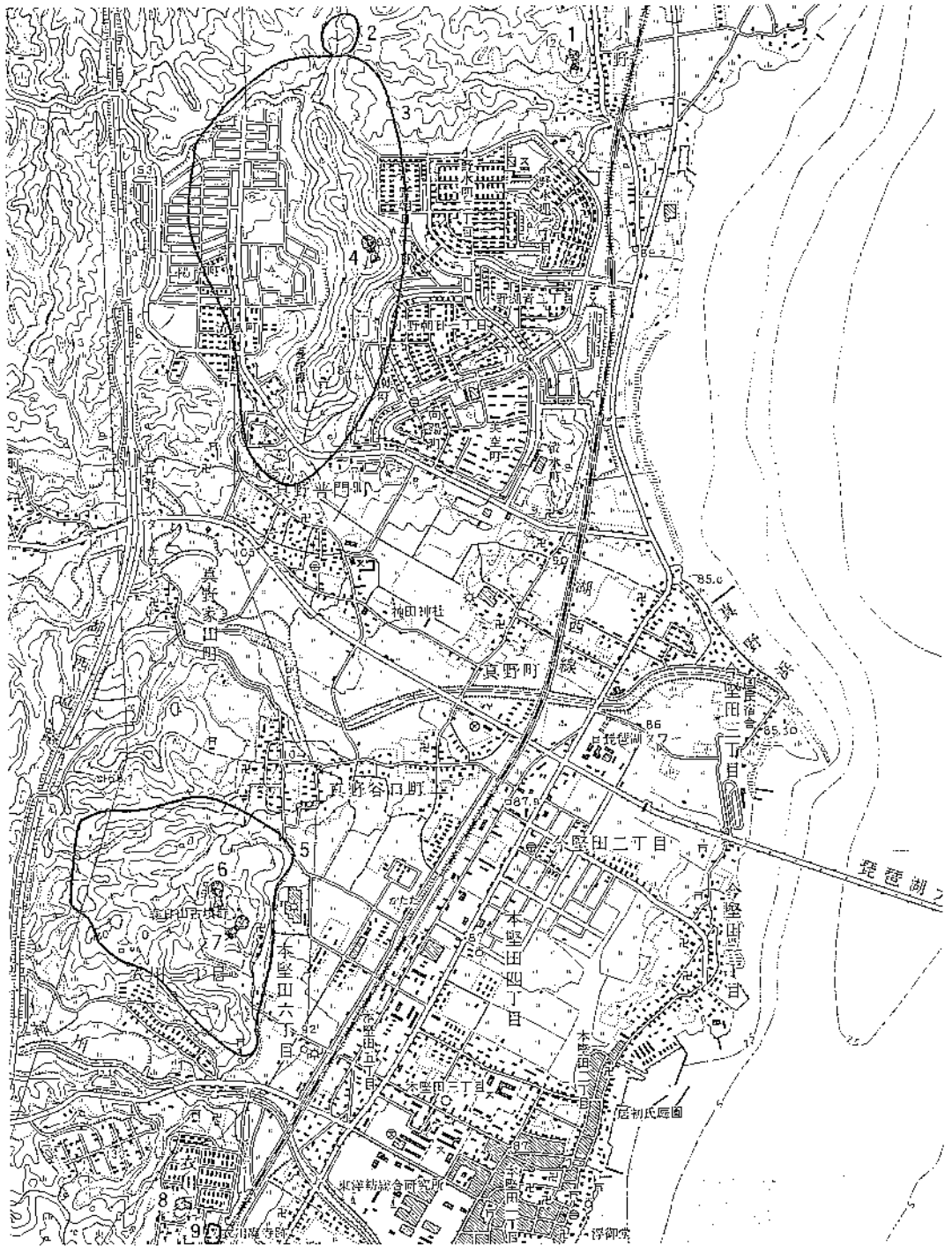


図7 堅田平野の古墳 (1 : 25,000)

- |                   |            |             |
|-------------------|------------|-------------|
| 1 : 道風神社1号墳       | 2 : ヨウ古墳群  | 3 : 曼陀羅山古墳群 |
| 4 : 和瀬大塚山古墳       | 5 : 春日山古墳群 | 6 : E-12号墳  |
| 7 : E-1号墳 (春日山古墳) | 8 : 西羅1号墳  | 9 : 衣川廃寺    |

とする。

まず和邇大塚山古墳の概要から見てゆく。当古墳は春日山古墳群と真野川を挟んで対峙する志賀町小野の後期群集墳で著名な曼陀羅山古墳群中にあり丘陵頂部に立地する。墳長は72m、後円部は直径50m・高さ8m・頂部径約20m、前方部は長さ25m・幅30m・高さ5mを測り、後円部は2段築成である。主体部は粘土層とされており、銅鏃や中国製髹髹鏡が出土している。外表施設は葺石が見られる。主体部および出土遺物より古墳編年のⅢもしくはⅣ期に位置付けられている。

そこで問題となってくるのは同じ平野を望む近接した位置に、ほぼ同じ時期に3基の前方後円墳が造営される点である。これら3基の前方後円墳、春日山の2基と和邇大塚山古墳とはどのような関係にあったのだろうか。

まずこれら3基の古墳を中心とした地域の動向から見てみよう。真野川南岸の春日山古墳群の前中期古墳はE12号墳の築造を契機として群集墳出現までほぼ連続して造営されると考えられるが、和邇大塚山古墳を中心とした真野川北岸については後続する古墳として前方後円墳である道風神社1号墳と円墳である同2号墳があるものの、その系譜が春日山ほど整然とはたどれない。また真野川南岸でも春日山古墳群の南に、5世紀中葉頃に比定されている帆立貝形古墳である西羅1号墳と後出すると思われる方墳である同2号墳が存在するものの、これに前後する古墳は知られていない。

用田政晴氏は古墳時代において1ないし2の旧群単位での地域性があることを述べているが<sup>5</sup>、今問題としている滋賀郡は前方後円(方)墳などの首長墓を視点とする限り、堅田平野を中心とする北部とそれ以南の南部に分けて考えたほうがよさそうである。滋賀郡北部において首長墓と思しき古墳が見られるのは、先述の古墳がある堅田平野に限られている。このことを踏まえた上で3基の前方後円墳と1基の帆立貝形古墳を見ると、そのいずれもが古墳時代前・中期における滋賀郡北部の首長墓ということになるであろう。

それではなぜ先の動向で見たように首長墓と思われる古墳はその立地を変えるのであろうか。まず3基の首長墓の前後関係について述べる。細川修平氏は春日山E1号墳と和邇大塚山古墳の築造年代について、墳形等から並行ないしは春日山E1号墳が先行する可能性を示唆しているが、その前後関係は判然とし<sup>6</sup>ないのが現状である。しかしこの2基の古墳の築造年代が近接していることは、すなわち春日山E12号墳がこれらに先行することを意味する。また3基の前方後円墳の後に西羅1号墳および道風神社1号墳が造営されることは先にも述べた通りである。当地域において古墳時代全般を通じて古墳造営の中心となるのは春日山であることはまず間違いないが、4～5世紀前半の首長墓となりうる古墳は真野川を介した小地域間で時期において移動していることは明らかである。そしてそこには4～5世紀前半における小地域間の首長権の移動が看取される<sup>7</sup>のである。その後5世紀後半に至って首長墓は前方後円墳もしくは帆立貝形古墳の形を採らず、春日山に円墳が連続して造営されることになり<sup>8</sup>6世紀後半の群集墳造営を迎えることになる<sup>9</sup>のであろう。いずれにせよ春日山E12号墳は堅田平野における首長墓の中でトップを切って造営されたものと言えるのであり、それに続いて和邇大塚山古墳・春日山E1号墳が堅田平野の首長墓と



して築かれることになるのである。

e) おわりに

以上のように春日山E12号墳を見てきたわけであるが、古墳のことを考えたこともない筆者の力量不足と分布調査による結果を前提としたゆえに、強引かつ論拠のないものになってしまった感がある。これは将来公園整備に先立つ調査が実施されることであろうから、その調査結果を見た上で再考したいと思う。それまでに皆様の御批判および御教示が頂ければ幸いである。

また春日山古墳群の分布調査全般およびE12号墳については用田政晴氏・細川修平氏に何かと御教示頂いた。記して謝意を表したい。

(岩橋 隆浩)

#### 参考文献

近藤義郎編「前方後円墳集成 近畿編」山川出版社 1992

丸山竜平「春日山古墳」『昭和四十八年度滋賀県文化財調査年報』滋賀県教育委員会 1974

丸山竜平「大津市春日山古墳群調査報告」『昭和五十年年度滋賀県文化財調査年報』滋賀県教育委員会 1976

丸山竜平「古墳群の変遷」『季刊考古学』第9号 雄山閣 1984

丸山竜平「近江和邇氏の考古学的研究」『日本史論叢』4 19774

1 前回の調査に参加した京都教育大学考古学研究会は前方後円墳であるとしているが、その後出版された前方後円墳集成では取り上げられていない。

『史想』22号 京都教育大学考古学研究会 1988

2 後述する八日市市雪野山古墳や大津市皇子山1号墳がその例である。

3 細川修平「二つの前方後円墳」『紀要』7号 財滋賀県文化財保護協会 1994

4 都出比呂志「墳丘の形式」石野博信ほか編『古墳時代の研究7 古墳Ⅰ 墳丘と内部構造』7 雄山閣 1992

5 用田政晴「三つの古墳の墳形と規模—近江における古墳時代首長の動向および特質メモ作成のために—」『紀要』3号 財滋賀県文化財保護協会 1990

「第2部地域の概要 第1章近江 第1節近江東部」近藤義郎編『前方後円墳集成 近畿編』山川出版社 1992

6 細川修平「第2部地域の概要 第1章近江 第2節近江西部」近藤義郎編『前方後円墳集成 近畿編』山川出版社 1992

同書の記述内容以外の詳細を細川修平氏に御教示をうけた。

7 集落の分布状況および古墳の立地より堅田平野を3小地域に分けて、それらの中で首長権の交代が行なわれていたとする論がある。

新出高久「堅田平野をめぐる前期古墳」『志賀町埋蔵文化財調査報告』志賀町教育委員会 1982

8 2基の前方後円墳に続く円墳は現在のところ5基知られているが、このうち2基程度は西羅1号墳等の首長墓と同時期に造営されたものとも考えられる。

9 春日山古墳群における横穴式石室導入の発端となる古墳は、E支群から続く尾根上にある1支群の4号墳が考えられる。14号墳は堅田平野・比良山地・曼陀羅山・琵琶湖方面の眺望が非常に優れた主尾根の先端に位置する直径33m・高さ約4.5mの円墳で、墳頂部はE支群で見られる大型の円墳に比べると平坦地が狭い特徴を持つことから、木棺直葬と言うよりもむしろ横穴式石室を主体部に持つ古墳を想定したい。その卓越した規模と立地より横穴式石室導入以降の真野川南岸における首長墓と考えることができる。

## 第2節 E支群から見た春日山古墳群

### a) はじめに

今回の調査では新たに28基の古墳が確認できた。なかでも、E支群では13基確認でき、古墳の数はほぼ倍にあたる32基となった。これまでは、支群内に前方後円墳を有すること、横穴式石室には他の支群の石室に比べて大きな石を使用し、独立丘陵上に分布することから、E支群は首長墓群の後裔を主張するグループの造墓活動によるものと考えられていた。しかし、今回の調査によって、木棺直葬や小規模な横穴式石室墳と考えられる古墳がE-12号墳から派生する尾根上に見つかり、従来の見解に再考を迫るものとなった。ここでは新発見の古墳を分析し、E支群の特徴を検討したい。

### b) E支群の分布状況(図8)

E支群の分布する丘陵の西側は谷が南北から入り込み、春日山古墳群内において独立丘陵の様相を呈している。これまでの分布の中心は堅田平野を見渡せる南東部であったが、今回の調査で南斜面とE12号墳から東へ延びる尾根上にも古墳が分布することがわかった。E支群では、前方後円墳であるE1号墳・12号墳を除く円墳群の分布は南東丘陵部、南斜面、北東尾根の3つの小支群に分けることができる。

南東丘陵部の分布は従来のE支群の特徴を顕著にあらわす状況である。それは、堅田平野の眺望に適した好立地であること、横穴式石室には他の支群の石室に比べて大きな石を使用していること、前方後円墳と横穴式石室墳との時期差を埋めるべく木棺直葬と考えられる円墳や石棺直葬墳が存在することなどである。

南斜面には、南東丘陵部に比べて小型の直径10m前後の古墳が散在して分布しており、内部主体はいずれも横穴式石室であると考えられる。このなかでは、規模の大きな古墳は高位置に、小規模墳は低位置に築かれていることがわかる。

北東尾根では、尾根上に繋がるように古

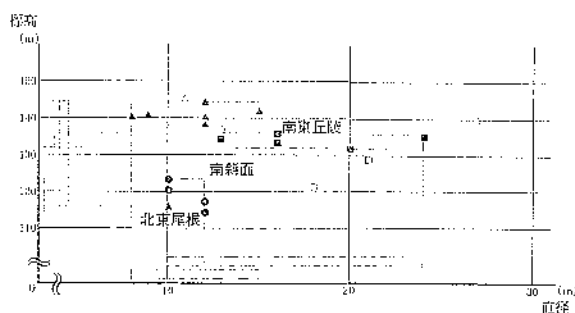


図8 古墳の規模と築造位置(E支群)

- ○ 北東尾根(白抜きは木棺直葬と考えられるもの)
- □ 南東丘陵(白抜きは木棺直葬と考えられるもの)
- ▲ △ 南斜面(白抜きは木棺直葬あるいは古墳状隆起と考えられるもの)

墳が分布している。規模は直径20mを越えるものから8m程のものまで様々であるが、15m以上の古墳は墳頂部が平坦であることから木棺直葬墳と考えられる。木棺直葬墳がE12号墳の近くに位置し、規模の小さい横穴式石室墳が尾根が平坦に広がる低位置に分布している。

以上が小支群の概要である。E支群は従来から木棺直葬墳を古墳群内に含んでいたが、今回の踏査で新たに2基発見できた。これらは他の古墳に比べても墳丘規模が大きく、立地もE12号墳に近い尾根上であり、他の横穴式石室墳に比べて古式の様相を呈しているといえよう。このことは、E支群での古墳の築造が前方後円墳であるE12号墳にはじまり、つづいてE1号墳さらに木棺直葬墳、石棺直葬墳へ続き、横穴式石室へと移り変わっていくことを示すものであろう。また、丘陵の低位置にある横穴式石室墳については、現状を観察すると使用している石材が小型であること、想定出来る石室の規模が小規模であるということから、周囲の古墳よりも新しい年代が与えられよう。このことから、春日山古墳群の築造年代の幅が従来考えられていたよりも広げられ、古墳群の終焉が繰り下がってくると考えられる。

#### c) おわりに

分布調査の結果、既存の支群内では古墳数が増加し、また新たにK支群を設けることとなった。今回の報告ではE支群についてのみ若干の考察をおこなったが、まだまだ解決すべき問題点は多く、反省しなければならない。E18・19号墳の築造年代の評価などは他の群集墳との比較検討が不十分である。

自らの責任も省みず、考えられる問題点をあげることが許されるのであれば、まず第一に古墳群の造営集団についての問題を挙げるができる。古墳の造営集団を考える場合、有力氏族と擬制的同族関係を結んだ家父長家族とするのが一般的である。古墳総数の多い大古墳群の造営集団については、特に発掘調査が行われず分布調査と墳丘および石室の実測図、古墳の分布状況からいくつかの支群を設定し、各支群ごとの分析を経て造営集団を導き出す方法があり、200基を超える春日山古墳群についても本稿の研究史にあるようにこの方法で分析がなされている。ただ、この方法については若干の疑問点が残る。これは群構造を捉えやすい支群についてのみの分析であり、これから導き出された造営集団とその相互関係は各支群ごとについては正確に表せているかもしれないが、それはあくまで一側面であり、春日山古墳群全体にフィードバックできるかという点必ずしもそうではない。古墳の築造とは従来建築材料としては使用しなかった石材をつかって構造物を築くという当時の先端技術であり、築造場所＝墓域についても、有力者ほどより広い墓域を占有できるということから、むしろ、少数の古墳で構成され群構造を捉えにくい支群（G支群・I支群）にこそ古墳群造営集団の本質が潜んでいるといえよう。また、各支群ごとに特徴をあげてもそれらは所詮古墳群内の集団関係に包含される程度のものであるともいえる。各支群の個性を統括できる集団の存在がなければこの大古墳群は存在し得ないのであり、前項目を踏まえた上での分析・考察がなされなければ、地域はもちろん日本の古代社会構造の解明という古墳群の歴史的解釈には程遠いものになってしまうおそれがある。

以上、自身の反省すべき点を棚に上げ、他人事を言うようなことばかり述べてしまったが、それは問題点を解決出来ない筆者の力量不足からくるものである。皆様の叱咤、ご批判を仰ぎなが

ら再考する機会があれば是非その責を果たしたい。

(大崎 康文)

註1：春日山古墳群の終焉が、従来考えられていたよりも繰り下がり衣川廃寺の造営時期に近づくことは、春日山古墳群の造営母体が衣川廃寺春日山古墳群のそれであると考えた場合、素直に理解できる。ただし、両者の造営集団の関係についてはより一層の分析が必要であることは言うまでもない。

註2：近藤義郎「佐良山古墳群の研究」1967など

註3：小丘陵に分布するG支群は比較的大きな横穴式石室墳がそれより小規模の横穴式石室墳を伴って分布している。また、I支群は30mをこえる大型円墳と小規模な横穴式石室墳が散在している。

## 編集後記

昨夏は、暑い暑い日々が続きに続き、琵琶湖の水位は史上最低値を更新し続けました。その結果、湖岸のここかしこでは普段は日にすることの出来ない湖底遺跡の一面が姿を現わすことになりました。そして、明けて1月17日午前5時46分の悪夢の始まり。大自然の営為の前で、人間の無力を感じ続けた一年でした。被災者の方々には、衷心よりお見舞い申し上げます。さて、本号も多くの論考を掲載することが出来ました。つきましては、多くの方々からのご叱正とご指導を賜れば幸いです。

平成7年3月

### 紀 要 第 8 号

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会  
大津市瀬田南大萱町1732-2  
Tel (0775) 48-9780・9781

印刷・製本 富士出版印刷株式会社  
大津市札の辻4-20  
Tel (0775) 23-2580 Fax (0775) 24-6668